

9

| 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
|--|--------------------------|----------------------------|------|
| 14104010 | NK-T 細胞の分化と免疫系制御で働く分子の同定 | 小野江 和則(北海道大学・遺伝子病制御研究所・教授) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>小野江氏を中心とする研究グループはNK-T細胞の存在を発見し、以来、その免疫系における機能解析や、その分化に関する研究において、日本トップクラスにあり、世界的にも第一線にある。本研究でも多くの成果をあげ、NK-T細胞と動脈硬化症や自己免疫疾患の発症との関連を確認しつつあるなど、研究内容は高く評価でき、今度の進展も期待される。現在の研究の方向性も適切と考える。</p> | | | |

10

| 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
|--|------------------------------|--------------------------|------|
| 14104011 | 免疫系シグナル伝達機構とその異常に起因する免疫病態の研究 | 菅村 和夫(東北大学・大学院医学系研究科・教授) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>菅村氏らは STAM1、STAM2、およびこれらに会合する AMSH、AMSH-LP などの細胞内分子を単離し、その機能を解析した結果、免疫不全症や間質性肺炎、炎症性腸疾患(IBD)のシグナル伝達系の異常に関与していることを明らかにした。</p> <p>この研究は日本から発信された独創的研究テーマであり、順調に進んでいる。研究の結果、STAMs や Hrs が、当初、研究代表者らが予想したシグナル伝達分子ではなく、サイトカイン受容体やシグナル伝達分子の細胞内輸送と分解の制御に関わっていることが明らかになってきたために研究の方向性を多少修正する必要が生じているようであるが、これは研究の進展に伴うものであり、その方向性で推進することが適切であると考ええる。</p> | | | |